高崎経済大学論集　第43巻　第３号　2000　59頁～76頁

〈研究ノート〉

開発プロジェクト評価と発展プロセスへの視点

矢　野　修　一

An Evaluation of Development Projects and Development Process: An Alternative Thinking

Shuichi YANO

はじめに

途上諸国における開発プロジェクトの問題点というと、すぐさま「非効率」、「不透明」などの言葉が頭をよぎる。なぜうまくいかないのか。どうすればいいのか。合理的な評価基準はないものだろうか。まともに管理・運営されない数々のプロジェクトに対し、恭しく下されるのは、大抵、もっと経済効率を重視せよ、情報を開示せよ、住民参加を促進せよ、といった御託宣である。もちろん、こうしたことひとつひとつが重要でないとは言わない。だが、お題目をただ形式的に並べるだけでは、途上地域における開発プロジェクト、そしておそらく開発全般にまつわる諸問題は、けっして解決されないだろう。途上国の現実に軸足を置かぬ時、マーケットメカニズム、コーポレートガバナンス、さらには民主主義の崇高な理念であれ、状況の改善には何ら役立たないであろう。

事は容易ではないが、本稿では、ひとつの古典的業績を再検討することで、問題にアプローチするための手がかりを模索してみようと思う。

1967年に出版され大きな反響を呼んだアルバート・ハーシュマン（A.O.Hirschman）の著書 *Development Projects Observed*（Brookings Institution: Washington, D.C.,1967. 以下、本書とする）は、スペイン語、ポルトガル語、イタリア語、そして日本語に翻訳され、英語圏以外でも多くの読者を得た。原著は1968年、1970年と版が重ねられたが、初版以来30年近くを経た1995年、著者自身による新たな序文が付け加えられ、リプリント版が出された。

本書は、世界銀行の融資を受けた電力、電気通信、灌漑、河川・渓谷開発、鉄道、道路、パルプ製造、牧畜など、各地域における11 のプロジェクト（中南米４、アジア３、南欧１、アフリカ３）を題材にして、それぞれの開発プロジェクトに固有の「構造的特性」とプロジェクトが実施される

国・地域に固有の「構造的特性」との相互関係を明らかにしようとしたものである。本書のもとになった調査は、1964年から65年にかけて行われた。

途上地域の経済発展を展望するにあたり、要素賦存状況、既存の価値観、制度、社会的・政治的構造などを重視する見方が一般的だが、ハーシュマンは本書において、支配的見解ではどうにも見込みのない状況でも、適切なプロジェクトを遂行することによって変化を引き起こし、発展への道を切り開くのは可能であることを明らかにしようとした。発展の前提条件探しという、ある意味で不毛な作業を迂回するとともに、途上地域における開発プロジェクト評価において効率性以上に重要な側面に目を向けようとしたのである。けっして事態を楽観しようとしたわけではない。また、すべてのプロジェクトに妥当する一般命題などという、ありもしないものを導き出そうとしたわけでもない。支配的見解ではさして重視されないものの、それぞれのプロジェクト・技術には固有の特性があり、それが発展に向けての学習効果、態度の変化、制度変革を生み出すこともあれば、これまた固有の特性を有する社会の反発を引き起こし、発展どころか混乱を導く場合もあるということ、プロジェクト遂行者はこうした構造的特性の相互作用がもたらす帰結にもっと留意すべきであるということを主張したのである。ハーシュマンの「可能性追求主義」（possibilism）は、新たなる「可能性」に光をあてると同時に、通常は見落とされがちな、しかしながら非常に現実的な「制約条件」をも露わにする[1]。

のちに詳しくみるように、本書で展開された開発プロジェクトへの接近方法は、いかにもハーシュマンらしいものだが、当時、シャドー・プライス、社会的費用・便益分析、割引利子率などの手法・概念を用いて、より科学的・合理的な融資基準を模索していたオーソドックスな世銀のそれとは、大いに趣を異にするものであった。本書の研究には世銀も様々な形で支援をしたが、出てきた結論は世銀の正統な基準を示したものとは言えず、スタッフを少なからず戸惑わせる内容であった。こうしたこともあってか、長らくハーシュマンの研究は、敬して遠ざけられる形となった。

だが風向きは変わりはじめたようにも思われる。世銀における開発プロジェクトへの評価基準は、各方面からの批判もあって、狭義の経済分析を越え出て、定性的要素が加味されつつある。冷戦時代も終わりを告げ、開発への視点が単に経済的なものから文化・社会的なものに拡大していくにつれて、手詰まりの世銀がハーシュマン的手法をあらためて見直すようになったのである。世銀がその開発哲学をどれだけ本気で変えようとしているのかについては、大いに疑問が残るが、初版出版後、約30年の年月を経てリプリント版が出された背景にはこうした事情もある[2]。

日本においても以前より、開発援助の現場に近いところからは、狭義の経済学的プロジェクト評価への批判が出されていた[3]。また受け入れ社会に与えるインパクト、開発の社会的側面にもっと注意しないと援助は当初の目的を果たし得ないとして、近年では「プロジェクト・サイクル・マネジメント」の不備を問う声も出始め、「援助の社会的影響」が大きな研究テーマになってきた[4]。

Development Projects Observed には、麻田四郎、所哲也による適切な訳者解説が付された、読みやすい日本語訳があったが、残念なことに今は絶版状態にある[5]。開発援助を取り巻く時代状況

の変化、本書で展開された議論の重要性に鑑み、以下では、麻田・所訳を参照しつつ本書の内容を紹介したうえ、その現代的意義をあらためて確認していきたい。

本書の射程は、開発プロジェクトに対する、より具体的・現実的な視角の設定にとどまらず、経済発展、社会変動にまつわる議論全般に及ぶものである。正統的理論が「これしかない」、「このようにしかならない」と断定する根拠は、実は薄弱であり、個別プロジェクトにせよ、社会の発展プロセスにせよ、およそ出来合いの理論ではとらえきれない展開を見せること、とらえきれないから不可知論の世界に放置するのではなく、帰納的分析を積み上げることで、そうした展開への視点を豊富化すること、そして主体的行動への若干の指針を提供すること。真摯なケーススタディに基づく本書は、ハーシュマンの全業績を再評価するうえでも見落とせない論点に満ち溢れている。

重要な概念、用語に着目しながら、まずは本書の内容を概観しておこう。

１．*Development Projects Observed* の概要

（1）目隠しの手の原理

ハーシュマンの造語癖は有名である。経済学をはじめとする社会科学のオーソライズされた概念、用語では、具体的歴史的現実に必ずしも十分向き合えない。こうした場合、ハーシュマンは、狭義の経済学におけるテクニカル・ターム、首尾一貫性にこだわるよりは、人々の直感に働きかけるような新たなる概念を生み出し、認識し得なかった現実に人々を向き合わせる舞台を設定しようとする。これがハーシュマンの魅力とも危うさともなっているのは、今や周知のことであろう。

本書第１章で展開される「目隠しの手の原理」（The Principle of Hiding Hand）も、通常の経済学では見えない、しかしながら現実世界ではきわめて重要なメカニズムを正当に評価すべく、編み出された用語である。

個別のプロジェクトが辿ったビヘイビアを見つめていくと、いずれも当初予期しなかったような難しい事態に直面し、よろめき、つまずきながら何とかやりくりされてきたことが明らかになる。でもなぜ人は、毎度こうした困難な事態に直面するにも関わらず、あえて開発プロジェクトに着手してしまうのか。

ハーシュマンは言う。計画の前途にそびえ立つ困難、障害のすべてをあらかじめ知っていたなら躊躇してしまい、誰もそのような計画には着手しないだろう。必要な計画を実行に移さねばならないとき、困難を事前に知ることは不幸なことだとも言える。最初から困難がわかっていたら人は何事にも着手しない。起こりうる諸問題を過小評価するからこそ、人は未知のプロジェクトに図らずも挑戦してしまうのである、と。

「われわれにはどうしても自分の創造力を過小評価する傾向がある。したがって、われわれが取り組まなければならない仕事の難しさについても、ほぼ同じ程度に過小評価することが望ましい。

そのような仕事に手を出してしまうのは、そうした二つの過小評価が相殺されるからであり、もしそうでなかったならば、われわれはそのような仕事には手をつけないであろう。この原理は非常に重要であり、名前をつける価値がある。」(p.13)[6]

こうして彼は、まるで「神の手」がわれわれの目を覆い、行く手を遮っている障害を見えなくさせているからこそ、危険で困難なプロジェクトも実行に移されるのだと述べ、これを「目隠しの手の原理」と名づけたのである。むろんこれは、アダム・スミスの「神の見えざる手」(Invisible Hand）からのアナロジーであろうが、明らかにしようとしている事態は全く異なることに注意したい。

ハーシュマンは、マルクスの著名な言葉を少しばかり言い換え、自らの言わんとするところを次のように述べた。

「人間は、自分が解決できると考える問題だけを取り上げ、後になって、それが実際のところ予想以上に難しいことに気づくが、その時はもはやにっちもさっちもいかぬ状態に陥って、その夢想だにしなかった困難とどうしても戦わざるを得なくなり、挙げ句のはて、時には大成功さえも収めるのである。」(p.14)

ハーシュマンは人間の豊かな「創造力」の根源に、ある意味で「想像力」の不足を見ているのである。経済、社会の発展過程を分析する際、「人間行動の意図せざる帰結」を重視する彼の姿勢は、こうしたところにも見いだされる。

ハーシュマンは、途上地域における開発プロジェクトを考察するにあたって、この「目隠しの手の原理」に着目することの重要性を指摘する。問題解決能力が弱く、革新がいまだ制度化されていない途上地域においては、プロジェクトにまつわる費用・困難は過大視される一方、プロジェクトの生み出す変化の中間的成果・部分的進歩はなかなか心象化できない。それゆえ、「目隠しの手」が特に必要となる。「目隠しの手」は、とにかくプロセスを起動させ、気づいたときにはもはや全力を挙げて問題解決に取り組まざるをえないような状況を作り上げるメカニズムである。発展は確かにリスク・テイカーを必要条件とするが、このメカニズムは、ある条件を必要とする事態が発生した後で、その必要条件なるものを実現させる（pp.15-34)。危険負担意欲、企業者精神など、通常、発展のための前提条件とされるものが発展の結果、あるいはその途中で生み出されるとする主張は、『経済発展の戦略』以来、一貫して展開されているし[7]、本書の後段でも繰り返し登場する重要な論点である。

本書において「目隠しの手の原理」は、また「『見せかけの真似』の手法」、「『見せかけの総合計画』の手法」、「ユートピアの幻想」、「蜃気楼イメージ」などの言葉とともに語られ、それらが各プロジェクトの具体的足跡で補足されている。開発プロジェクト遂行のためには、人間の想像力の不

足を補うメカニズムが必要だというのは、卑俗ではあるが確かに魅力的な指摘である。

とはいえ、本書の主たる内容がこれで終わりというのなら、ハーシュマンは、「尻込みしがちな者をその気にさせるメカニズム」の必要性を説くだけの、「まゆつばもの」の扱いを受けていたであろう。彼がわざわざ「目隠しの手の原理」を提唱したのは、途上地域においては、結局ないものねだりに陥りがちな前提条件探しの不毛性、プロジェクトをとにかく起動させることの重要性にまずは目を向けさせようという意図からであった。そして、計画の特性により、待ち受けている困難が過小評価されやすく、したがって着手されやすくなる計画と、困難が明白すぎて体系的に無視されやすい計画とがあるということを明らかにしようとしたのである。「目隠しの手の原理」に単なる冒険主義を読み取ってしまっては、ハーシュマンの本意を見誤ることになる。無謀な冒険主義と有望かつ正当なチャレンジとを分かつ境界はどのあたりにあるのか。これを見きわめるには、「目隠しの手」によって隠されている諸困難の具体的態様をある程度認識しておく必要がある。

（2）不確実性

開発プロジェクトが、その名の通り「プロジェクト」である以上、何らかの「確実性」と「知識」を前提としている。しかしながら、可能な限りの知識を集約し、どれほど念入りにプロジェクトを用意しようとも、予想もしなかったような困難に直面するのが常である。また困難に出くわす傾向は、プロジェクトの特性によっても異なってくる。ハーシュマンは予想外の困難に直面する、この性向を「不確実性」と表現し、各プロジェクトのケーススタディから不確実性の具体的態様を分類して見せた。開発プロジェクトは「不確実性の不可避性」を認識しつつ策定されねばならない。推移を完全に見通せないまでも、どのような事態が、どのように生じがちであるかについて知見を得ておけば、社会にとって危険きわまりない冒険主義は回避できる。

ハーシュマンによれば、不確実性は、プロジェクトにおける供給面、需要面双方で発生する。彼が指摘する不確実性の具体的態様を概観しておこう。

供給面の不確実性の第１に挙げられているのは、「技術」にまつわる不確実性である。各国の天然資源、自然条件に密接に関わるプロジェクトは、この種の不確実性に見舞われやすい。パキスタンのカルナフリ製紙工場計画、ウルグアイの草地改良計画のように、当初予定していた国内産投入物が実は不適切であること、あるいは国内の自然条件についてより詳しい知識なしにはプロジェクトが進まないことが後になって判明するような場合などがこれにあたる（pp.39-45）。

第２は、「管理（Administration）」に関わる不確実性である。プロジェクトの管理は、必ずしも当初予定していたように理想的な形で進むとは限らない。管理面での不確実性は、社会的・政治的要因と密接に関連しているが、たとえそうした要因が同一でも、プロジェクトの種類によって管理面での困難に直面する傾向が異なることに注意が向けられる。

たとえば、途上地域ではけっして珍しくない二重社会、複合社会では、開発プロジェクトのなかにグループ間の対立が持ち込まれ、管理・運営に支障を来す場合が往々にしてある。ハーシュマン

がその典型的事例として挙げているのが、ナイジェリア鉄道公社である。ここでは、ナイジェリア南部のイボ族がトップマネジメントを牛耳ってしまい、部族間に不協和音が生じて鉄道事業の運営を困難なものとした。

しかしながら、二重社会、複合社会ではすべてのプロジェクトがこうした運命を辿るとは限らない。たとえば、ウガンダ電力局、エチオピアの電気通信事業は、部族間における共存・協力の必要性を教え込むトレーニングセンターの役割を果たした。ハーシュマンによれば、鉄道に比べ、電力・電気通信に要する人員は少なく、それだけ「派閥の形成」は困難になること、また事業の大部分が非常に複雑な機械の操作・維持であるだけに、従業員の間に同じ技術エリートに属しているという感情が生まれ、それが部族間の対立感情を和らげたのである（pp.46-47）。

この他にもハーシュマンは、管理面の不確実性として、プロジェクトが旧態依然たる官僚組織の既得権に抵触し、本来プロジェクトを支えるべき官僚組織によってプロジェクトが骨抜きにされる場合、プロジェクトが寄生勢力を生み出す場合を挙げているが、これも不可避的な事態ではなく、プロジェクトの内容そのものが外部の干渉の程度、またそれへの抵抗力を左右するということが具体的事例をもとに語られている。彼は、インド・ダモダール渓谷開発公社の例に触れ、プロジェクトが技術的に複雑であること、また職員の能力と士気の低下がプロジェクトのパフォーマンス悪化に直結するような計画は外部からの干渉を防ぎやすいとした（pp.52-56）。

第３に挙げられているのが、当初予定していたようには収入が伸びないといった資金面での不確実性である。資金面での困難は、予想されなかった技術的障害、グループ間の紛争による能率低下など、当該プロジェクトにおけるその他の面での困難を反映している場合も多いが、政策担当者の方針変更、移り気が主因となっていることもある。無論これも不可避的事態ではなく、エクアドルのグアイアス・ハイウェイ事業のように資金をイヤマークすることが対策の一つになりうるが、逆に、イヤマーク資金は寄生勢力のターゲットになりやすいという派生的弊害をも生み出す（pp.56-59）。ある種の不確実性の除去は、別の不確実性を生み出す、というのは、本書第２章の重要なテーマである。

供給面の他、需要面の不確実性としてハーシュマンが挙げる第１は、「超過需要」である。彼の念頭にあるのは、価格上昇で調整されるような超過需要ではない。プロジェクトが当初意図していなかった人々にまで期待を抱かせてしまい、多くの満たされぬ需要がプロジェクトへの反発、社会的緊張をもたらすような状況が想定されている。こうした指摘に典型的に見いだせるように、ハーシュマンは、プロジェクトの帰趨を左右する要因として、人々の嫉妬、官僚による威信の誇示、さらにはそうしたものを引き起こしやすいプロジェクトの特性などをも明示的に分析の対象とした。彼の議論が「異端」とされる理由はこうしたところにもあるのだが、今なお人々の注目を惹くのも、通常のプロジェクト評価では見落とされがちな局面が明確に意識されていたからである。

灌漑計画は超過需要の典型的事例であり、ハイウェイなどは超過した需要をかなり弾力的に処理できるプロジェクトである。プロジェクトの内容によってこの種の不確実性の持つ意味は多少は異

なるし、また超過需要が引き起こす利害対立が円満に解決されれば、紛争を建設的に解決する実地教育の意味も出てくるであろう。しかしながら、計画策定者は、開発プロジェクトが深刻な紛争、社会的政治的損害を引き起こす危険性に気づいていなければならない。ハーシュマンはこう述べ、開発プロジェクトに日常的について回る超過需要という不確実性の危険性に注意を喚起したのである（pp.59-65）。

第２は、「需要不足」である。計画完成以前に需要が確保されているような場合、需要不足という不確実性は小さいが、それでも、一時的な超過供給能力が生じる可能性はある。そのことが設備拡張を遅らせ、必要な時期に供給能力を維持できなくなるという事態を招き、プロジェクトを管轄するものの権限を侵蝕するような外部からの「過剰反応」を引き起こすこともある。今のところ需要は存在しないが徐々にそれが現れるだろうということで正当化されがちな「需要に先駆けた建設」は、「継起的な問題解決」という観点から合理性が見いだされる場合はあるが、やはり需要不足の生じる可能性は払拭されない。上述したような供給面での不確実性がある以上、相互に補完し合う複合体的投資計画でさえ、需要不足という事態を完全に回避することは困難である（pp.66-75）。

従来あまり注目されてこなかったとはいえ、ハーシュマンは、開発プロジェクトに不可避的につきまとう不確実性を以上のように分析した。そして、均整成長論や総合的投資計画によってはそれらを克服できないどころか、かえって対応のより困難な不確実性が生み出されること、開発プロジェクトの策定には、いわゆる「研究・開発」（Research & Development）における基本的姿勢に有益な視点が見いだせることを確認した。研究・開発における意志決定は、「期待される生産物の動作特性を事前に厳格に規定しない」、「期待される生産物が複数の要素からなるシステムの場合でも、要素間の調整を事前に厳密に規定しない」、「複数の代替的アプローチがある場合、どれか一つを事前の費用・便益分析により選び出さない」といったことを基本的特長とするものであり、こうしたスタンスの方がここで問題とされた「不確実性」にうまく向き合えるだろう。不確実性の存在を否定したり、不確実性を除去したりするのではなく、「目隠しの手」が覆い隠す不確実性の態様を知り、時には学習効果をももたらす不確実性の最適化を図るのが開発プロジェクトの具体的中身となる、というのがハーシュマンの主張である（pp.75-85）[8]。

（３）許容性と拘束性

上述のように、計画策定者、プロジェクト担当者の意図と無関係に（あるいはそれに反して）生ずる外部状況を、プロジェクトの特性と関連づけて検証する作業は重要だが、プロジェクト担当者たちの自由裁量の範囲、行使が計画の帰趨、効力を規定するという側面もまた分析されねばならない。開発プロジェクトには、立案者・担当者の自由裁量の余地がかなり存在するような特性を持つもの、あるいはそうした余地をほとんど残さないものがある。ハーシュマンは、前者をプロジェクトの持つ「許容性」（latitudes）、後者をその「拘束性」（disciplines）と名づけ、意志決定者自身が否応なく従わざるを得ない諸性向・圧力の所在、その具体的内容といった視点から、各プロジェ

クトの辿りがちな道筋を明らかにしようとした。ハーシュマンは、当時の一般的な開発プロジェクト評価方法から見ればかなり異質な、この許容性と拘束性という概念を駆使することで、「プロジェクトが実行されるか否か」、「プロジェクトが実施される速度」、「プロジェクトの成し遂げる仕事の質」、「プロジェクト実施という決定の持続性・非可逆性」に影響する具体的諸要因に人々の注意を向けようとしたのである。

ハーシュマンが取り上げた事例をいくつか見ておこう。まずは、「空間的・場所的許容性（拘束性）」である。一般に、河川へのダム建設、天然の入江への港湾建設といった自然条件に大きく左右されるプロジェクトに比べ、道路、学校、火力発電所などの建設は場所的拘束性は低い。「場所非拘束的投資」は「場所拘束的投資」に比べ、実施場所に拘束がないという事実のために紛争、抗争の原因を生みやすく、それゆえ投資決定は遅れがちだが、様々な代替的投資に関する理性的吟味、政治的妥協の機会を提供するものである。こうした点からは、低開発諸国で推奨されるべき一面を有するが、場所拘束的投資が無意味なわけではけっしてない。場所拘束的投資からは自国の天然資源、自然条件を十分に活用するための大規模投資の仕方を学べるだろう。計画の分裂、政治的依怙贔屓、資金不足、技術の貧困といった危険性を内包する場所非拘束的投資を実行に導くには、当初、場所拘束的投資を装ったり、徐々に場所拘束的投資の性格を強めるなどすることが必要となる場合もある（pp.87-95）。

建設事業について指摘される「時間的拘束性」とは、どのようなものだろうか。自然のサイクルが工期の設定を厳格に拘束するような場合、たとえば、モンスーン期の増水に対応するようにダム建設を実現せねばならないような事例がこれにあたる。自然のもたらす時間的拘束性は、とにかくそのプロジェクトをやり遂げねばならないような状況を作るという意味で訓練機関の役割を果たす。自然条件以外にも、契約の履行、政治権力による期限設定なども時間的拘束性をもつこともあるが、その拘束力はえてして自然の拘束力よりは弱く、スピードアップに伴う質の低下も生じやすい。このように、時間的拘束性を高めることによって望ましい状況を作り出すことには限界があることも確かである（pp.95-102）。

またハーシュマンは、「質を量によって代替することの許容性」（Latitude in Substituting Quantity for Quality）に言及することで、とにかく拘束性さえ高めればプロジェクトのパフォーマンスを維持し、社会にとって望ましい状況を創出しうるという単純な議論に釘を刺している。途上地域においては、プロジェクトの生み出す生産物・サービスの質の低下が量の増大によって償われるかぎり、その質の低下を可能としてしまう許容性をア・プリオリに悪いものと決めつけることはできない。質を量で代替することには何らかの代償が伴うのは確かだが、教育、道路建設、あるいは住宅建設といった領域でさえ、この種の許容性が存在することは、先進国と状況の違う途上国においては、経済的合理性の表現となっている場合がある。より多くの人がその恩恵に与かれるように量を拡大することができるのなら、多少の質の低下を伴ったとしても合理的な場合がある。どの程度の質の低下なら許容されるのかという別の問題はある。だが、往々にして誤解されているもの

の、質の低さは必ずしも管理者の怠慢や怠惰によるものとは言えない、というのがハーシュマンの主張である（pp.112-19）。

この他にもハーシュマンは、「建設から操業への移行期間における時間的拘束性」、「汚職に対する許容性」、「政府支出を民間支出によって代替することの許容性」などを挙げているが、いずれにせよ彼は、許容性、拘束性のどちらかに軍配をあげるといった単純な評価軸を提供しようとしているわけではない。確かに、許容性が存在しないことによって判断基準は明確になるし、無駄も防止され、意志決定は促進される。プロジェクトの責任者・担当者は行動の明確な基準・目標を得ることができるだろう。だが一方、許容性が存在することによって、合理的な意志決定の仕方を学んだり、あるいは、外来の経済行動モデルを自国の実状と必要性に適合させたりする時間的余裕を持つことができる場合もある。許容性と拘束性は、プロジェクトの善し悪しを決める単純な物差しというよりは、プロジェクトの帰趨を見極めるうえで重要な概念として提示されたのである（p.127）。

（4）特性受容と特性形成

不確実性の支配する世界で各プロジェクトの辿る軌跡を少しでも陽表化すべく、許容性と拘束性という概念装置を提示したハーシュマンは、プロジェクトの選択、デザイン、評価といった、より具体的な領域に踏み込んでいく。プロジェクトが実施される社会には固有の「特性」があるが、開発プロジェクトをデザインする際には、どのような特性を「受容」し、どのような特性をその社会において新たに「形成」しようとしているのかを認識することが重要となる。たいていのプロジェクト策定者はこの面への配慮が足りなすぎる。ハーシュマンは、価格理論における「価格受容」、「価格形成」という表現を借用し、「特性受容」（Trait-Taking）と「特性形成」（Trait-Making）という対概念を用いて開発プロジェクトと社会の特性の相互作用を分析しようとした。

「特性受容」とは、当該社会の既存の特性を当面は変化しないものと想定したうえで開発プロジェクトを策定することを意味する。地域の利用可能な特性がプロジェクトの建設・運営に全く適合しうる状況は好都合であるように思われるだろうし、反対に、必要な資材、技術がないならそれを輸入するという形で現地の特性をそのまま受容することも起こりうる。地域の現状をとりあえず受け入れるという点で、特性受容的計画は現実的ではあるが、その反面、完全に特性受容的な計画は、生産物を増加させる以外には、環境をそっくり温存しがちであり、低開発状況を打破する変革拠点にはなりにくい。やむを得ないと認めた当該社会におけるマイナスの特性が一時的なものではなく、計画を遂行していくうえでますます強化されていくことも起こりうる（pp.131-35）。

「特性形成」とは、プロジェクトを遂行するために、当該社会の既存の特性を変えたり、新しい特性を作り出していくことを意味する。技術水準、社会政治的条件、文化的制約等を考慮すれば、低開発地域において特性形成的プロジェクトを遂行することは容易ではないが、特性形成こそが低開発地域の現状を打破するうえで必要とされていることも確かである。ただその際、プロジェクトにとって不可欠の特性が、計画発足当初から必要な量と質でもって利用できない場合でも、多くの

特性は過程のなかで漸進的に習得されるものと楽観視できることもある（これは後述する「副次効果」の議論でも重要となる視点である）。ハーシュマンが「引きずられた特性形成」として言及しているように、必要とされる特性の変化、社会的変動が技術開発に引きずられ、計画の進行とともに生み出される場合もある（pp.148-53）。状況によっては、「許容性」の小さい仕事を組み込むことで価値観、行動基準に非連続的な変化が生まれ、特性形成の可能性が増して、さもなければ延期されたり放棄されたりしかねないプロジェクトが実行されることもある。こうして、許容性の存在と欠如がともに特性形成に役立つ場合のあることが、ここでも確認されるのである（pp.135-39）。

ただ、ここで冷静なプロジェクト策定者は、特性形成一般にまつわる困難ないしは危険性を認識しておかなくてはならない。プロジェクトが機能するのに必要な特性がなかなか形成されずに、計画自体が破綻してしまうという事態は実際に起こりうるし、必要とされる特性があまりにも社会との親和性を欠くために社会から予想外の反発を引き起こし、プロジェクトが挫折する可能性もある。開発プロジェクトを分析し評価しようとすれば、特性形成の内容がどのようなものであるか、特性の変化がいつ起こり、どの程度期待できるものなのかを明確にせねばならない。ハーシュマンは、暗黙のうちに特性形成を前提しながら、計画の成否が特性形成如何にかかっていることを認識できなかったがために失敗した事例としてナイジェリアの鉄道プロジェクトを挙げたが、開発プロジェクトは通常意識されている以上に特性形成的であることが多い（pp.139-47）。したがって、こうした失敗例はナイジェリア鉄道公社に限らず、かなり普遍的なものと言えるだろう。

ハーシュマンのここでの結論をまとめれば、以下のようになろう。すなわち、特性を形成することがまさに開発プロジェクトそのものである場合が一般的なのであって、特性形成たることを自覚し、そのプロセスをある程度まで意識下にコントロールしていくことは可能であり（だからこそ、プロジェクトなるものの策定がテーマになりうる）、そのことによって冒険主義、すなわち「目隠しの手の原理」に盲目的に頼りきる事態を回避できる。

以上述べてきたような特性受容と特性形成を十分考慮しなかったがために、プロジェクトの持続性に齟齬をきたし、変革の可能性を見失ったり、回避し得たはずの対立状況を引き起こしてしまう場合が往々にしてある。従来の研究においてはほとんど扱われていなかったが、開発プロジェクトと社会のそれぞれに固有の構造的特性の相互作用を、「特性受容－特性形成」という対概念で分析することによって、ハーシュマンは、特に途上地域における開発プロジェクトには、目に付くアウトプットを基準とした効率性以上に重要な評価基準が必要であると主張してきたのである。

（５）副次効果

開発プロジェクトを評価するうえでは、プロジェクトが直接生み出す財貨・サービスのほか、具体的な形を取らないため見分けにくいが、きわめて重要かつ強力な間接的効果をどのように評価すべきなのかという問題が常に生じてきた。だがこれまでは、この問題が誤った形で提出されてきたのではないか。各プロジェクトが直接的生産物のほかに間接的効果を生み出すとされ、多くの人々

はまさに、この「付随的アウトプット」をどのように計量すればよいのかということに腐心してきた。そして、直接的生産物と間接的効果の大きさを測定したうえ、直接的・間接的アウトプットをより効率的に生み出すプロジェクトを選び出すこと、これが開発プロジェクト評価の主軸に据えられていた。

でもこれでいいのだろうか。ここまで長々と紹介してきたハーシュマンの概念は、実はこうしたスタンスを根底から覆すために用意されてきたものと言っても過言ではない。ハーシュマンにとって、副次効果とは、文字通りの「副次的」なものであるどころか、途上地域の開発プロジェクトにおいては、通常、間接効果、副次効果と称されるものへの注目こそが中心的な課題なのである。副次効果に関するハーシュマンの結論に耳を傾けよう。そこには途上地域の社会発展に関するきわめて重要な視点が込められている。

副次効果は、プロジェクトによって生み出されるアウトプットであるが、プロジェクト自体を成功に導くためにどうしても形成（ないし排除）されねばならない「特性」でもある。すなわち、副次効果は、プロジェクトの主目的・主効果を実現させるために必要不可欠なインプットでもある。副次効果は、特に途上地域においては、純粋にアウトプットとしてのみ現れるというよりは、こうしてアウトプットであると同時にインプットとしての性格を併せ持つような混合副次効果であることが一般的であるとハーシュマンは言う（pp.161-64）。オーソドックスなプロジェクト評価に慣れた論者、あるいは目的と手段を截然と区分する「費用－便益」分析、「投入－産出」モデルに親しんできた経済学者は、概念上の縺れのようにしか表現し得ない、こうした事態を理解できない。だが、事態は「継起的に」理解せよ。これがハーシュマンの繰り返すメッセージである。

特性形成の議論でも出てきたように、プロジェクトの成功にとって必要な特性は、プロジェクト開始当初から存在しているとは限らず、まさにプロジェクトが開始されることによって生み出されていくもの、換言すれば、プロジェクトが開始されなければ生み出されないものである（この局面で「目隠しの手の原理」が重要となる）。インプットしようにもプロジェクト開始当初は存在せず、あるいは存在してもきわめて稀少であり、プロジェクトとともに生み出されていくために、インプットされる必要のあるものが最初からはインプットされない。でも、それでよい。途上地域の状況を考えれば、それが普通だろう。最初からインプットできないから諦める（支配的見解では一般に、プロジェクト成功のための前提条件を欠く、と認識されるだろうから）のではなく、インプットされるべきものがあとから生み出されるようにプロジェクトを策定するというのが、途上地域における開発プロジェクトの基本的姿勢ではないのか。「副次効果それ自体がしばしば計画のデザイン、成否の内容そのものに他ならない」（p.169）と述べるハーシュマンの意図を敷衍すれば、このようなものとなるだろう。

利害関係が確立し、それに応じた各種機関・組織が存在して、あらゆる人が各人の義務を遂行しているような先進国なら、ここで問題としているような副次効果、間接効果にそれほど注目しなくてもよいかもしれない。しかしながら低開発という環境で同じことを期待するのは、その環境の存

在を仮定によって否定していることになる。低開発という状況をうち破るべく政策展開しようにも、途上地域では政策の効果をそのまま遂行することが困難な場合が多い。だから途上地域では、副次効果に着目したうえ、迂回的問題解決、便乗的問題解決の方途を探ることが必要となる（p.170）[9]。

ハーシュマンは言う。プロジェクトの実施によって社会変動が引き起こされ、そしてその変動がもしそのままの形で提起されたなら、即座に拒否されるようなものであったとしても、望ましくない変動を相殺するような利益をそのプロジェクトが生み出せば、その変動が社会に受け入れられる場合がある。あるいは、計画発足当初、意識的には同意もしくは採択されることのなかった社会的・制度的変革、ないしは態度の変化が、計画の進行とともに徐々に現れてくる場合がある。灌漑計画にある種の社会政策が忍び込まされるように、開発プロジェクトにはこうした「トロイの木馬」的性格があり、まさにこの性格こそが、低開発状況の打破という、一瞬たじろぐほどの難題に途上地域の人々自身を巻き込んでいくものとなる（pp.171-73）。

ハーシュマンはこうして副次効果の重要性、途上地域の開発プロジェクトにおける中心的役割を主張する。だが副次効果が上述したようなものである以上、一元的尺度を設定して計測するのは不可能である。開発プロジェクトに含まれる様々な側面を一つの指標に集約して単一の尺度を作り、それによって開発プロジェクトをランクづけることなどできない。政治家の恣意的判断を排するためには客観的な尺度が必要だと「専門家」（technicians）は言うかもしれない。だがハーシュマンによれば、一元的尺度を設定しようなどという尊大な行為は、最終決定については一切の責任を回避し、「政治的」要因によるものだから仕方がないと済ませてしまう専門家の無責任な態度と結びついている。一元的尺度を設定しようとすると、現実には、多数の重要な項目が専門家の守備範囲から除外されることになるので、意志決定者は直観的判断、体験に基づいた判断にかえってより多く頼らなくてはならなくなる。一元的尺度に頼ろうとすればするほど、ますます直観的判断を助長し、意志決定者の無責任な判断を認めることになってしまうのである（pp.179-80）。プロジェクトの合理的評価に関し、喧しく議論がなされている今、この指摘は傾聴に値する。

不確実性が除去しえぬ以上、開発プロジェクトの評価には、必ずや直観的判断に委ねられる部分が残る。だがその判断能力を高めるのは一元的尺度や統一的基準ではない。プロジェクト立案者・担当者の直観的判断を助けるべく、プロジェクトが辿るであろうビヘイビアを見つめるためのいろいろなセットの眼鏡を用意すること。ハーシュマンが本書で行おうとしたのはこれに尽きる（p.186）。合理的・一元的評価基準という呪縛をのがれ、慣れ親しんだ「効率性」という眼鏡を外し、「不確実性」、「拘束性－許容性」、「特性受容－特性形成」、「副次効果」といった眼鏡をかけることにより、プロジェクトが変化への全く新たなる扉を開く、その理路を認識できるようになるだろう（p.188）。

２．*Development Projects Observed* の射程

（１）開発プロジェクト評価への異端的視角

Development Projects Observed の概要は上述の通りである。ここではあまり触れられなかったが、ハーシュマン自身は、より多くの具体例に則しつつ、示唆に富む説明を行っている。

先にも述べたように、本書において最も重要な主張は副次効果の議論に盛り込まれているが、われわれはここに集約されているようなハーシュマンの開発プロジェクト論をどのように評価すればよいのだろうか。喜多村浩は本書日本語版への興味深い書評のなかで、ハーシュマンの副次効果論を簡潔かつ適切にまとめ、その意図を十分理解しつつも、議論は完全な不可知論に近い立場に到達してしまったのではないかと危惧を述べた[10]。確かにハーシュマンは開発プロジェクト評価に関する簡便な道具立てを用意できたわけではないが、本当にそういう評価しかなしえないのだろうか。

以下では、次のような点を指摘し、本稿のまとめとしたい。すなわち、本書での議論は、開発の現場が直面する具体的課題に対して、伝統的な「費用－便益」分析からは抜け落ちた視角を提供するものとして現在でもなお有効であること、またそれが社会科学の方法論に関しても重要な問題提起となっているということ、この２点である。

まず日本における２人の論者の議論を簡単に紹介し、近年、開発プロジェクトの現場で何が問題になっているのか、どういう視点が必要とされているのか確認しておこう。

長年にわたる国連地域開発センター勤務の経験から、「真に民衆の生活改善に役立つような開発は、これまで放置されていた民衆の潜在的エネルギーを掘り起こすことによって、巨額な追加費用を要せずとも推進しうる余地がきわめて大きい」という、ハーシュマンを彷彿させるような認識をもって地域開発を研究してきた長峯晴夫は、科学的厳密性を装いながら具体的課題に対応しえていない伝統的な「費用－便益」分析に批判的な立場をとる[11]。今は亡き長峯は生前、開発推進のために最も重要なのは、在来の方法によって将来を予測したり、マスタープランを描くことではなく、「人」、「地域社会」が不測の事態に時々刻々対応していく問題解決能力、すなわち「キャパシテーション」を強化することであるとし、「意図的なキャパシテーション過程」の設計こそが地域開発の役割であると繰り返し述べていた。

第三世界は、価値観、資源、技術、制度、情報から成る開発推進能力にしたがって判断と行動を繰り返すが、その過程での成功や失敗体験を通じて自らの開発能力を高めていく。「キャパシテートされた社会」とはこうした持続的過程のなかで育成されていくが、過程の持続性が様々な要因により阻害されるのが第三世界の現実である[12]。回帰分析で変量間の定量的関係を求めたり、成長率の予測作業に躍起となるよりは、真に学際的手法を駆使しつつ、帰納的分析を積み上げ、こうした現実に迫る方が実り多い、と長峯は言う。1974年に国連本部が提出した『開発のための分析と計画のための統合方式について』という報告書は、キャパシテーション概念の提唱をはじめ、彼の評価

する論点が数多く盛り込まれていたが、報告書のフォローアップが国連本部におけるエコノミスト中心の開発計画・分析・政策企画部（CDPPP）に移管されるや、内容は骨抜きにされてしまった[13]。国連本部においても一時真剣に検討された「試行錯誤過程を通じての学習という思想と行動様式の形成」こそ、「費用－便益」分析では対応しきれない開発プロジェクトの眼目であるとした長峯の指摘は、本稿で見てきたようなハーシュマン的視点が開発現場で今なお有効であることを示唆している。

援助受入れ側に生ずる予期せぬ「社会的影響」を、開発援助論における重要テーマとして、近年明示的に分析対象としている佐藤寛の議論も、ハーシュマンによる「不確実性」への着目、「特性受容－特性形成」論の有効性に人々の耳目を集める機能を果たすだろう。

彼は、どの途上国にもあてはまる理想的プロジェクトを想定し、それを各途上国に移植していこうという、技術論的アプローチでは受入れ社会により多くの摩擦・軋轢を引き起こしかねないという基本的認識に基づき、経済のロジックには取り込みえない、それゆえ数値化するのが困難な援助受入れ社会の側の反応、援助の受容能力を問題にしようとした。プロジェクトの評価は、比較的計測が容易で客観性も確保しやすいと見なされがちな経済的側面に偏ることが多いが、数値化できない影響はどれだけ関数を複雑にしてもそもそも計算式には入ってこない[14]。だからといってどうでもよいものであるどころか、その影響を知らないことにはプロジェクト評価はおぼつかない。

佐藤は、プロジェクトと地域社会とのコンフリクトを日常的なものと見ているが、必ずしもこれを否定的にはとらえていない。確かに摩擦・軋轢は起こらないに越したことはない。受入れ社会に様々なマイナス効果をもたらすからである。したがって、こうしたコンフリクトを導かぬよう、援助受入れ側の政治、経済、社会文化状況は前もって精査されるべきであるが、それでも発生すべき時は発生してしまう。けれども見方を変えれば、摩擦・軋轢は、プロジェクトに内在する問題点、受け入れ社会への意図せざる影響の存在を知らしめるサインであり、これに対処することによって、援助供与国・受入れ国双方がともに理解を深めることのできる場合がある[15]。一般に、プロジェクト・サイクル・マネジメントの考え方においては、責任範囲外とされる問題を真正面から取り上げようとした佐藤は、*Development Projects Observed* への言及はまったくないが、まさにハーシュマンが課題とした事柄を、冷戦体制終結後の援助研究における中心課題の一つに据えたのである。

開発プロジェクト評価に関する長峯晴夫、佐藤寛両者の的確な指摘は、まさに間接照明のごとく、ハーシュマン的スタンス、分析枠組みの有効性を現在に浮かび上がらせている[16]。

（２）発展プロセスへの視点－正統的経済学からの乖離－

本書全体を通してハーシュマンは、自らの議論を正統的な「費用－便益」分析、収益率分析にとって代わるものと位置づけてはいないが、彼の副次効果論は、それらと真っ向から対立する視点を提供するものと言ってよい。アウトプットが同時にインプットでもあるという認識のもと進められた副次効果の議論は、目的と手段、アウトプットとインプットを互いに独立なものとする考え方と

は交わりえないからである。先に挙げた書評論文のなかで喜多村浩が述べているように、ハーシュマンの「継起的な問題の解決は、正統派の手段＝目的モデル、あるいは均衡条件から導かれた『最適化』の手法と相容れない考え方の系譜に属している」[17]。

したがって『経済発展の戦略』から連綿と引き継がれ、本書第5章に結実する議論への評価は、正統的な理論経済学者とそれ以外の論者とでは全く異なったものとなる。

理論経済学者からすれば、現代経済学に要求される厳密なモデル化もなされていないような代物は、いかに興味を引こうと単なるアイデア以上のものとは見なされない。*Development Projects Observed* に直接言及したものではないが、ポール・クルーグマンがビッグ・プッシュ論を再評価する議論のなかでハーシュマン（ならびにミュルダール）的方法に与えた評価がこのようなものであった。モデル化されない叙述的・定性的、そして個別状況対応的な分析では説得力もなく、長期間にわたる知的影響力は持ちえない。開発経済学が往時の力を失っていったのも、イデオロギーの問題ではなく、ハーシュマンやミュルダールなどがモデル化の手続きを怠ったからである。これが経済学というディシプリンに強くこだわる理論経済学者の一般的評価なのかもしれない[18]。

ただ、1990年代、マサチューセッツ工科大学（ＭＩＴ）を舞台に定期的に開催された「ハーシュマン・セミナー」に参集した、クルーグマン以外の研究者たちは、肯定するにせよ、批判、留保の姿勢を見せるにせよ、もう少し幅広い視点からハーシュマンの議論を評価しようとしていたようである。

セミナーへの参加者の一人マイケル・ピオーリは、理論経済学の分野でハーシュマン的方法が受け入れられなくなった背景として、経済学の側の変質を指摘している。悲惨な世界恐慌の光景がいまだ人々の目にこびりつき、ケインズ経済学が隆盛を極めていた時代、経済学の世界では、単なるモデル化よりも経験的証拠が重視され、事態の推移を説明しうるアイデアならいかなるものでも、とりあえずは受け入れる用意のようなものがあった。ハーシュマンがハーバード大学に赴任した頃は、まさにこの雰囲気が残っており、ハーシュマンも自らの中核的仕事はこの雰囲気の中で取り組むことができたはずだとピオーリは振り返る。しかしながらその後は、開放的かつ学際的な窓は閉ざされ、経済学は外部からのアイデアに寛容ではなくなっていった。だからといってハーシュマンの議論の有効性が損なわれたわけでは全くない。モデルの精緻化は進めど経験的領域との接点が薄れ、内容が貧弱化していった狭義の経済学よりも、実践に身を置く人々の関心は、むしろハーシュマンの議論の方に向けられてきた、というのがピオーリの評価である[19]。ランス・テイラーも同様の指摘を行っているが[20]、経済学者の「訓練された無能力」（trained incapacity）とは、今や言い古された言葉であろう。

また「低開発」について、矛盾に満ちた諸力、意思の混乱の反映とする見方をハーシュマンと共有するエマ・ロスチャイルドは、経済が前進していくことへの期待と変化への抵抗が併存している緊張状態をどう取り除くか、またより小さな管理しやすい緊張にどのようにもっていくかというハーシュマンの問題意識の的確さに触れ、現在の開発における問題は、規模の経済のモデル化という

クルーグマン的なものとは異なることを指摘した[21]。

クルーグマン以外のハーシュマン・セミナー参加者の多くが注目したのが、*Development Projects Observed* の諸議論にも内包される「行為・実践を通じての社会的学習」という視点である。一国の発展に重大な影響を与えるのは、「その国が何をしたか、あるいは何をした結果、何がどうなったかという関係」であると述べ（p.5)、副次効果の分析に典型的なように、発展のための前提条件、必須投入物など、発展プロセスの途中ないしはその結果満たされ、生み出されうるものであると指摘するとき、明らかにハーシュマンは「学習」ということを想定している。学習は行為を通じて可能となるものであり、事前に察知しえぬ不確実性、不均整、さらにはそこから生まれる何らかの緊張が人々の行為を引き出すこともあるとすれば、均衡万能論者、合理的計画経済論者の目には忌避すべきものと映る不確実性、不均整などは、抑制するというよりは、できるうる限り意識下にコントロールすべきものとなる。だからこそ、不確実性に彩られた世界での「プロジェクト」策定がテーマとなりうるのである。

社会的学習という点について、ハーシュマンの議論はいまだ曖昧であり、どんな不均衡、どんなボトルネックなら、望ましい社会的学習という結果を導き出すのか自明ではないという批判はある[22]。たとえ不確実性、不均整が行為を導くきっかけになったとしても（そしてその際、「目隠しの手の原理」なるものが機能している可能性はあるにせよ)、行為の望ましさまで保証しないからである。『経済発展の戦略』ではあまり明示的に述べられなかったこうした点は、*Development Projects Observed* ではかなり一般的な形にまとめられていると思われる。

確かに、モデル化はなされていない。だが、そもそも「行為・実践を通じての社会的学習」は厳密に単純化されたモデルには馴染まないものだろう。そしてモデル化に馴染むか否かが、「行為・実践を通じた社会的学習」という認識の重要性を測る尺度ではない。開発の具体的現実が突きつけてくる問題は切実なものであって、リサ・ピアティが批判したように、経済を社会から切り離し、意味の変化や情念を分析対象としないまま精緻化されてきた経済学の技術的水準に合わせる形で、開発研究のテーマ・手法が狭められるべきではないのである[23]。

こうしたハーシュマン・セミナーにおける論点をいくつか垣間見るだけでも、*Development Projects Observed* の射程がおぼろげながら見えてくる。副次効果の議論に集約されている本書の分析は、単に開発プロジェクト評価に関わるものではなく、期待、不満、情念、嫉妬などが渦巻く発展プロセスへの視点も豊富化させる。そしてその視点は、経済学の積み残している、あまりにも大きな課題のそれぞれをも照射しているのである。

おわりに

本書は、1995年に著者自身による新たな序文が書き加えられてリプリント版が出された。この序文に示されているように、もともと本書は、テーマが通底する三部作の最後を締めくくるものとし

て執筆されたものである。すなわち、途上諸国の経済発展をテーマとする『経済発展の戦略』、途上諸国、特にラテンアメリカにおける政治発展の具体的プロセスを扱った『進歩への旅』[24]という、発展のややマクロ的な側面を分析した２冊に続き、世界各地の途上諸国における個々の開発プロジェクトの推移をテーマとする本書を書き上げることで、自らの開発研究の区切りにしようとしたのである。

本書の内容はここで見てきたとおりだが、結果的にそこでの議論は、単に三部作の締めくくりという位置づけにとどまらず、自らのその後の著作で扱うことになる、社会科学のより幅広いテーマへの架け橋となったとハーシュマンは回顧する。様々な分野に影響を与え続けている彼の代表作 *Exit, Voice, and Loyalty* の着想に大いに貢献した要因の一つが、本書におけるナイジェリア鉄道公社の分析なのである[25]。「許容性」が小さく、パフォーマンスの維持には好都合な条件を本来整えているはずの鉄道事業の成果が思わしくない原因は、不満を口にし（voice）、改革圧力となるべき顧客があまりにも簡単に競争相手たるトラック輸送に逃げていく（exit）という状況にあるのではないか、という分析がその後の著作につながっていったと言ってよい。

開発という物語には、崇高な目標を目指す人間の諸活動に共通する感覚がつきまとうということ、つまり出来合いの理論や客観的基準では見通しきれない、ある種不思議で謎めいた側面を有するものであること。「目隠しの手の原理」の主張には、このことをあらためて世に訴えるという隠された意図が込められていたということも、新たな序文で確認されている。

ハーシュマンは、絶望の淵に何度落とされようとも一条の光に希望を託そうとする人々の営み、人間の創造的行為の可能性を正当に評価しようとしてきた。数多くの著作を通じて、既成の概念装置では感知しえない「可能性」に具体的道筋をつけつつ、その制約要因をも浮かび上がらせてきたのだが、直接的には開発プロジェクトを対象とする本書も、彼の大きな問題意識を反映するものと言ってよいだろう。

（やの　しゅういち・本学経済学部助教授）

〈注〉

1　ハーシュマンのプロフィール、方法論に関しては、以下の拙稿を参照願いたい。
矢野修一「A.O.ハーシュマンの開発論と市場経済観－情念制御の開発思想－」本山美彦編著『開発論のフロンティア』同文舘、1995年、同「可能性追求主義・不確実性・民主主義－ハーシュマン的方法論への視座－」『産業研究』第33巻第1・2号、1997年、同「『可能性追求』と『越境』の日々－亡命知識人ハーシュマンの回想－」『高崎経済大学論集』第42巻第1号、1999年。

2　R.Picciotto, “Visibility and Disappointment: The New Role of Development Evaluation”, in L. Rodwin et al., eds., *Rethinking the Development Experience: Essays Provoked by the Work of Albert O. Hirschman*, Brookings Institution: Washington, D.C., 1994.
世銀の援助理念・政策は様々な展開を経て、現在では、*Assessing Aid: What Works, What Doesn't, and Why*, Oxford University Press, 1998.（小浜裕久・冨田陽子訳『有効な援助－ファンジビリティと援助政策－』東洋経済新報社、2000年）に結実していると言われるが、その内容は必ずしも、以下で垣間見る本書の内容を反映するものではない、というのが筆者の印象である。「変化しつつある世界銀行」と言われながら、なかなか変化せず、相変わらずそのパラダイムが維持されていく実態を興味深く分析したものに、R. Wade, “Japan, the World Bank, and the Art of Paradigm Maintenance: *The East Asian Miracle* in Political Perspective”, *New Left Review*, No. 217, 1996. ならびに、大野泉『世界銀行－開発援

助戦略の変革－』NTT 出版、2000年、がある。

3　とりわけ、長峯晴夫『第三世界の地域開発－その思想と方法－』名古屋大学出版会、1985年、は興味深い論点に満ち溢れている。後で簡単に触れるが、長峯のこの労作は日本の開発研究において異彩を放っており、彼亡き後も読み継がれるべき貴重な業績である。最近、この著作の英語版が国際開発ジャーナル社より出版された（*Regional Development in Third World Countries: Paradigms and Operational Principles*, International Development Journal: Tokyo, 2000.）。

4　佐藤寛編『援助の社会的影響』アジア経済研究所、1994年。

5　麻田四郎・所哲也訳『開発計画の診断』巌松堂出版、1973年。

6　以後、*Development Projects Observed* からの引用は、原著の頁数のみを記す。和訳は基本的に麻田・所訳を踏襲したが、若干の変更を行っているところもある。

7　たとえば、A.O.Hirschman, *The Strategy of Economic Development*, Yale University Press: New Haven, 1958, pp.1-7.（麻田四郎訳『経済発展の戦略』巌松堂出版、1961年、3-12頁）を参照せよ。

8　ハーシュマンによれば、需要面で相互に支え合う多数企業間の同時多発的投資を目指す均整成長論は、研究・開発戦略にとってはまさに鬼門とも言うべき条件、すなわち、正確な予定表、構成諸要素間の事前調整、目的と手段との全面的整合性を求めるものである。こうした需要面における不確実性の除去を目的とした政策は、供給面における不確実性によってもたらされる潜在的損失を増大させてしまう。不確実性は、大量の資本を固定してしまう同時多発的投資よりも、小規模投資を継起的に行う方が結果的に小さくなるだろう。ハーシュマンはこのように述べ、理屈のうえでは可能でも現実には不確実性を増大させてしまう均整成長論の不経済性、危険性を指摘した（pp.77-79）。

9　政治状況のみならず、ハーシュマンは経済状況についても先進国と途上国の違いに言及し、副次効果を考慮すべき理由を述べている（p.176）。

10　喜多村浩「開発経済学における一つの異端的視角」『アジア経済』第15巻第５号、1974年、73頁。

11　長峯、前掲書、41-42頁。

12　同上、236頁。

13　同上、169頁。

14　佐藤、前掲書、19-21頁。

15　同上、137-38頁。

16　ここでのハーシュマンの議論を、より直接的に再評価したものに、峯陽一『現代アフリカと開発経済学－市場経済の荒波のなかで－』日本評論社、1999年、がある。

17　喜多村、前掲論文、73頁。

18　P. Krugman, “The Fall and Rise of Development Economics”, in Rodwin et al.,eds., *op.cit*. これとほぼ同じ内容の論文の日本語訳が、高中公男訳『経済発展と産業立地の理論－開発経済学と経済地理学の再評価－』文眞堂、1999年、第１章に収録されている。

19　Rodwin et al., eds., *op.cit*., pp.13-14.

20　L.Taylor,“Hirschman’s Strategy at Thirty-Five”, in Rodwin et al., eds., *op.cit*., pp.59-62.

21　E.Rothschild,“ Psychological Modernity in Histrorical Perspective”, in Rodwin et al.,eds., *op.cit*.

22　C.Sabel, “Learning by Monitoring: The Institutions of Economic Development”, in Rodwin et al.,eds., *op.cit*., p.239.

23　L.Peattie, “Society as Output: Exit and Voice among the Passions”, in Rodwin et al.,eds., *op.cit*.

24　A.O.Hirschman, *Journeys Toward Progress: Studies of Economic Policy Making in Latin America*, The Twentieth Century Fund, 1963.

25　A.O.Hirschman, *Exit, Voice, and Loyalty: Responses to Decline in Firms, Organizations, and States*, Harvard University Press, 1970.

この著作の内容・意義については、矢野修一「『Exit-Voice』論と公共性」（上・下）『高崎経済大学論集』第42巻第２・第３号、1999年、を参照のこと。